

## 前期：キリスト教と政治思想

オリエンテーション

### 1. イデオロギーとユートピア

- 1-1：リクール1
- 1-2：マルクスとマルクス主義
- 1-3：黙示的終末論の系譜
- 1-4：ティリッヒ1
- 1-5：ティリッヒ2
- 1-6：リクール2
- 1-7：知恵思想の視点から
- 1-8：パウロとローマ帝国

6/26

### 2. キリスト教社会主義

- 2-1：キリスト教社会主義—イギリス・アメリカ・日本—
- 2-2：宗教社会主義—ティリッヒ—
- 2-3：賀川豊彦のキリスト教社会主義
- 2-4：解放の神学

7/3

7/10

7/17

7/24

## Exkurs

キリスト教と仏教1

キリスト教と仏教2

## <前回>リクール2

### (1) イデオロギーの三つの次元

#### 2. 現実の転倒としてのイデオロギー

- ・正統化としてのイデオロギー

正統化の主張と信仰

- ・象徴的統合化、自己同一性としてのイデオロギー

#### 4. 象徴体系によって行動は媒介される、行動は意味の了解を前提とする。世界を理解し行動するには意味世界をイメージにもたらし象徴体系が必要。

現実（集団と個人の）を保持するイメージ、社会的行動を律する秩序形式を保持する構想力

↓

保守的効能

### (2) ユートピアの諸次元

- ・ Paul Ricoeur, Die Hermeneutik der Sakularisierung. Glaube, Ideologie, Utopie, in: *Kerygma und Mythos VI-9. Zum Problem der Sakularisierung*. Hamburg, 1977.

#### 5. 病理としてのユートピア

「宗教はアヘンである。」

別の現実を夢見ることによって実践を回避する。

#### 6. 批判としてのユートピア

正統化の要求と信頼とのギャップを暴露する。

#### 7. 可能性の領域を開くユートピア

歴史的現実とは異なる現実（本来性？）を描き共有する能力

### (3) イデオロギーとユートピアの弁証法

8. 生の弁証法：自己同一性と自己変化 → 成長する、あるいは生きている

ヘーゲルあるいはドイツ観念論からティリッヒへ

次元の生成に限定されない生の生成一般を記述するために、ティリッヒはヘーゲル（若きヘーゲル）の生の概念に依拠しつつ議論を展開する。すなわち、生の生成は、自己同一、自己変化、自己帰還の三つの要素によって弁証法的に構成され、このような三要素から構成された生は、自己統一、自己創造、自己超越の三つの機能（運動）において自らを生成すると考えられる（ST.3, pp.30-32）。生は、とくに個的生命体において明瞭に見られるように、一定の形態（中心を有すること）を維持しつつ時間経過の中で変化してゆく。しかもその際に自己同一性は繰り返し新たに再構成される。変化のない自己同一も自己帰還しない自己変化も、生きた生命体にとっては死を意味する。こうした生の諸要素によって成り立つ構造体から、自己統一と自己創造と自己超越の三つの生の運動が生じてくるのである。精神の次元が現実化した人間の生に即して言えば、生は自らの世界を有する自己としての統一性を保持しつつ、文化的な営みを通して自己創造を行い、しかもその有限な生の限界を超えてより高いものへと進もうとする（昇華）。こうして、自己統一に関わる道徳、自己創造としての文化、そして自己超越としての宗教は、精神の次元における生の生成運動として統一的に捉えられることになるのである。

9. 信仰は究極的にはイデオロギーかユートピアかの二分法の拒否である。

自己同一性は信仰に基づく

「あなたの神である主を愛する」→「あなた」と「神」の相関性としての信仰  
信仰は、自己同一性に形を与えそれを保持する、と同時に、自己同一性の転換を可能にする。

「この世」に根を下ろすと同時に「この世」を根こぎにする

↓

終末論あるいは希望の弁証法：すでに、そしていまだ

↓

10. 象徴・言語・構想力という視点から理論を再構築すること。

時間論・終末論とは別の理論構成の可能性、そしてそれを再度時間論と統合すること。

キリスト（形態）：歴史・時の中心+ロゴス（動態と構造）

## 1 - 7 : 知恵思想の視点から

### (1) 古代イスラエルと知恵の伝統

1. 旧約聖書の「知恵文学」：ヨブ記、詩篇の一部、箴言、コヘレトの言葉

外典の知恵の書、シラ書（集会の書）

2. 創造や契約をめぐる諸思想を前提として、それを古代イスラエル民族が置かれた歴史的状況（王国形成・崩壊からバビロン捕囚、地中海・オリエント世界そしてヘレニズム世界の国際関係）において展開したものと位置付けられる。

3. 知恵文学の成立の場：フォン・ラートらの旧約聖書研究→宮廷知識人、とくにエジプトの書記学校に相当する官吏養成 学校の知識人

(1) 共同体の知恵（伝承）

(2) 対外的な国際関係が要求する国際的な知恵

4. 共同体の知恵：共同体の一員として習得すべき知恵（＝慣習的知恵）

因果応報原理の中心的な役割。

箴言 1 章 8 節「わが子よ、父の諭しに聞き従え。母の教えをおろそかにするな。」

## 5. ヘブライ的知恵文学の思想的特徴

### ①創造の知恵、あるいは知恵による創造

世界に内在する法則性への信頼→神への信頼＝「神への畏れ」

知恵思想は創造論を前提とし、それを展開する内容をもっている。この点は、下に引用した箴言 8 章において、神が天地創造に先だって、最初に「知恵」を創造した。

- ②神の創造行為の探求と称賛としての科学 → 自然を通した神の讃美  
→ 自然神学（書物としての自然）

### ③「知恵のある生活」

日常的な実践に関わる知恵に中心が置かれている。箴言 1 4 章などに見られる一連の対照（「神を畏れる一神に逆らう」→「知恵一無知」、「正しい一悪しき」、「謙虚一高慢」）からもわかるように、知恵は共同体において正しく・賢明に生きることを可能にする実践的知恵、世代から世代へと伝承された知恵。共同体の知恵は共同体の集団的な自己同一性の核心に属している。

### ④因果応報とその限界。個人の問題として、そして共同体・民族の問題として。

この因果応報の様々な破れを鋭く描き、因果応報の限界をはっきり見据えている。

「コヘレトの言葉」（「なんという空しさ、なんという空しさ、すべては空しい」）

「ヨブ記」は、正しく生きる人間（義人）が不幸になる、という問題（義人の苦難）

- ## 6. 箴言 1:7 主を畏れることは知恵の初め。無知な者は知恵をも諭しをも侮る。8 わが子よ、父の諭しに聞き従え。母の教えをおろそかにするな。 8:22 主は、その道の初めにわたしを造られた。いにしへの御業になお、先立って。 23 永遠の昔、わたしは祝別されていた。太初、大地に先立って。

11:1 偽りの天秤を主はいとい／十全なおもり石を喜ばれる。 2 高慢には軽蔑が伴い／謙遜には知恵が伴う。 3 正しい人は自分の無垢に導かれ／裏切り者は自分の暴力に滅ぼされる。 4 怒りの日には、富は頼りにならない。慈善は死から救う。 5 無垢な人の慈善は、彼の道をまっすぐにする。神に逆らう者は、逆らいの罪によって倒される。 9 神を無視する者は口先で友人を破滅に落とす。神に従う人は知識によって助け出される。

- ## 7. 詩編 19:2 天は神の栄光を物語り／大空は御手の業を示す。 3 昼は昼に語り伝え／夜は夜に知識を送る。 4 話すことも、語ることもなく／声は聞こえなくても 5 その響きは全地に／その言葉は世界の果てに向かう。そこに、神は太陽の幕屋を設けられた。

## （2）新しいイエス像の探求→知恵の教師イエス

- ### 1. キリスト教思想のパラダイム（20 世紀の聖書学の合意事項）：黙示的終末論の宗教者イエス

1980 年代以降の急速な変化：

- ・ 聖書学の学際化（神学部から人文諸学部へ）、アメリカ（60 年代以降）から世界中へ。  
方法の変化、新しい方法論による新たなイエス研究の進展。

↓

- ・ 古い合意事項（「史的イエスにおける確実な歴史的核としての終末論」）はもはや聖書学者が共有するパラダイムではない。他の立場によって相対化されてしまった。→キリ

スト教思想全般に対する帰結、特に組織神学（20世紀の組織神学はこの古い合意事項に依拠してきた）への影響は？

2. 「新しい探求には新しい方法が伴う。これまでの研究史においてたいがい新約聖書学の用いた主な方法は、文献批評と歴史批評だった。しかもこの場合の歴史批評というのは相当せまい意味で捉えた歴史批評だった。しかし最近、とりわけこの十年というもの、イエス研究者たち（および聖書学者全般）は、宗教史学、文化人類学、社会科学から得られる洞察やモデルを体系的に用い始めている。これらは比較資料や理論把握ばかりでなく経験的データや歴史的データから構成されたモデルも提供し、これを用いてかなりデータの乏しい時代のことを明らかにすることができる。新しい問いと新しい方法によって、見慣れた資料に新しい見方をすることができるようになった。」（ボーグ、24）

### 3. 聖書テキストの統一的理解に向けた動向

#### 1) 聖書神学の再構築（旧約聖書神学と新約聖書神学の統合）

「イエスは教導の客観的な中心を保持しなかったし、またユダヤ教のラビのように、もっぱらトーラーの解説に勤しんだわけでもない。しかしながら、イエスは<メシア的な知恵の教師>（ヘンゲル）として教えまた働いたのである。復活以前に既に、イエスは宣べ伝えるために（しばらくの間）弟子たちを派遣し、宣教の最後の段階では、弟子たちに自らの死の意味を説き明かしたのである。エルサレムにおける原始教会の指導部はイエスの弟子のサークルとイエスの家族とから構成されているのであるから、福音書伝承に従うならば、そこには、偶然の一致ではない慎重に仕上げられた連続性、つまりイエスの時から復活後の教会に至る連続性が認められねばならない。付加や新しい解釈、そして修辭的活動が福音書伝承の中に存在していることが示されうる限りにおいて、それらは旧約聖書や初期ユダヤ教の預言者、そしてエッセネ派やラビたちが伝承に関わり合う際にとったやり方との類比において判断させねばならないのである。」

Peter Stuhlmacher, "The Theme: The Gospel and the Gospels," in: Peter Stuhlmacher (ed.), *The Gospel and the Gospels*, William B. Eerdmans Publishing, 1991, pp.6-7.

2) 知恵思想の系譜：知恵のモチーフにおける旧約聖書と後期ユダヤ教の知恵思想から知恵の教師イエス、そしてさらにキリスト論（神的知恵としてのキリスト、ロゴス・キリスト論）へ至る知恵の伝統（知者の役割）の存在。Ben Witherington III

#### 4. イエスの宣教における「神の国」の再解釈。

黙示的終末論→転換的知恵

5. 「Qの人びとは『神の国』という言葉で迫ってくる社会的ヴィジョンに付きまとわれる。それにたいしてトマスの人びとは、ライフスタイルの挑戦という過激な個人主義を選び取る。」（マック、102）

少なくとも、世界や社会の終わりを期待するという意味での「黙示」はイエス伝承の最古層に属してはいない。むしろ、「神の国」において問題化しているのは、イエスの宗教思想と彼が生きた社会的世界との関わりなのである。

6. 「「神の国」という語句は神とイスラエルあるいは人類との関わりを語る物語全体を呼び起こすのである」（ボーグ、114）、「緊迫感是他の仕方と同様にうまく説明できる。知恵の教師の緊迫感である。……イエスが非終末論的であるというのは、イエス伝承にある危機の要素を否定することではない。むしろ、それはその危機の異なった解釈へと導くのである」（177）。

#### 7. 転換的知恵運動としてのイエス運動

人間を疎外する諸対立（ユダヤ人—異邦人、義人—罪人、男—女、金持ち—貧乏人など）を超えた新しい人間関係を創出するものであり、それは食卓を共にする分かち合いの共同体を生み出した（クロッサン）。既存の秩序を相対化し流動化させるヴィジョンを伴った知恵（→十字架という終局）。

### （3）知恵思想と「イデオロギーとユートピア」

#### 8. 知恵思想の二類型（クロッサン）

1) 慣習的知恵 (conventional) : 既存の社会秩序の中で「うまく生きる」「よく生きる」「正しく振る舞う」ことを教える。多くの共同体や社会において普通に見られる（旧約における箴言）。

社会的自己同一性は、様々な対立や矛盾を内包しつつも確固とした実在性をもって人々に実感できる既存の社会秩序を前提とする。社会秩序は重力の法則と同様に、疑いようもない不動の現実として経験される。

伝統的な諸宗教（「教会」型）の大切な役割の一つは、こうした既存の秩序に超越的な正当性を付与することに他ならない。→ 知識社会学（バーガー、ルックマン）

2) 転換的知恵 (subversive) : 慣習的知恵の虚偽性を暴露しつつ、新たなより人間的な生き方を可能にする別の知恵を教える。既存の社会秩序は決して不動の実在ではない。むしろ、「神の国」は「この世」の秩序を揺り動かしつつ（＝裁きつつ）現実世界へと到来しつつある。

#### 9. 「家族」に対して。

「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。わたしは敵対させるために来たからである。人をその父に、娘を母に、嫁をしゅうとめに。こうして、自分の家族の者が敵となる。わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない。また、自分の十字架を担ってわたしに従わない者は、わたしにふさわしくない。自分の命を得ようとする者は、それを失い、わたしのために命を失う者は、かえってそれを得るのである。」（マタイ 10.34-39）

#### 10. 「古代地中海世界における家父長的な大家族」への批判。

大家族の問題性：「幼児は、その父親がどぶやごみ捨て場に遺棄することなく、家族の一員として受け入れるのでない限り、文字どおり何者でもない」（クロッサン、113）。

この大家族＝支配—被支配の論理に貫かれた共同体、そこには自由人—奴隷、一握りの大金持ち—大多数の貧乏人という社会矛盾が凝縮されているのである（社会構造の縮図としての家族）。

11. 「イエスに触れていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。しかし、イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」そして、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された」（マルコ 10.13-16）。

12. 矛盾に満ちた大家族という過酷な現実の中で、子供にも、あるいは子供にこそ、生きる権利があることに気づかせる知恵＝現実を別様に見ることを教える知恵。

この知恵は既存の社会秩序を相対化し新しい人間関係のヴィジョンを与える。「知恵の

教師イエス」という場合の知恵とは、まさにこの種の知恵に他ならない。

13. 慣習的知恵→イデオロギー

転換的知恵→ユートピア

という対応関係は、さしあたり成立すると言える。

14. 問題は、イデオロギーとユートピアが本来弁証法的に統合されていたように、二つの知恵は単なる区別されるに止まらないことである。

古い社会的自己同一性とそれを正統化するイデオロギー的な慣習的知恵は、ユートピア的な転換的知恵によって相対化され、乗り越えられる。しかし、一端は転換的知恵として機能したヴィジョンは、次に段階においては、再び既存の秩序（既存の自己同一性）を支えるものとして、慣習的知恵として機能し始める。ユートピアは、既存の自己同一性を転換するが、再度次の自己同一性へと回帰する（儀礼論的に言えば、コミュニタスと構造の関係）。

15. イエスの宗教運動の「神の国」は、「新しい存在」(New Being)の現実化である（テイリッヒ）。

決して古くならない、常に新しくあり続けるヴィジョン。

永遠に到来しつつある現実性。

↓

黙示的終末論運動は繰り返し回帰する。

<参考文献>

0. 芦名定道、小原克博『キリスト教と現代——終末思想の歴史的展開』世界思想社。
1. フォン・ラート『イスラエルの知恵』日本基督教教団出版局。
2. 並木浩一『旧約聖書における文化と人間』、『「ヨブ記」論集成』教文館。
3. 富樫通一『旧約聖書の「知恵・教訓文学」』松籟社。
4. 関根正雄『旧約聖書文学史 上下』岩波全書。
5. 関根清三『旧約聖書と哲学——現代の問いのなかの一神教』岩波書店。
6. John Dominic Crossan, *Jesus. A Revolutionary Biography*, HaperSanFrancisco, 1995. (ジョン・ドミニク・クロッサン『イエス——あるユダヤ人貧農の革命的生涯』新教出版社。) , *The Historical Jesus. The Life of a mediterranean jewish Peasant*, HaperSanFraocisco, 1992.
7. Marcus J. Borg, *Jesus in contemporary Scholarship*, Trinity Press International, 1994. (M. J. ボーグ『イエス・ルネサンス 現代アメリカのイエス研究』教文館。)
8. Burton L. Mack, *Who Wrote the New Testament? The Making of the Christian Myth*, HaperSanFrancisco, 1995. (バートン・L・マック『誰が新約聖書を書いたのか』青土社。)
9. Ben Witherington III, *Jesus the Sage. The Pilgrimage of Wisdom*, Fortress, 1994.
10. Elisabeth Schüssler Fiorenza, *Jesus. Miriam's Child, Sophia's Prophet. Critical Issues in Feminist Christology*, Continuum, 1994.
11. Victor Turner, *The Ritual Process, Structure and Anti-Structure*, Aldine Transaction, 1969. (ヴィクター・W・ターナー『儀礼の過程』思索社。)